

氏名 細 谷 広 美

学位（専攻分野） 博士（文学）

学 位 記 番 号 総研大甲第105号

学位授与の日付 平成7年3月23日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第4条第1項該当

学 位 論 文 題 目 ペルーにおける山の神信仰の現在性
－アンデスの宗教的世界のダイナミズム－

論 文 審 査 委 員 主 査 教 授 小 山 修 三
教 授 藤 井 龍 彦
助 教 授 八 杉 佳 穂
助 教 授 池 上 良 正（筑波大学）
助 教 授 木 村 秀 雄（東京大学）

論文内容の要旨

本論文は従来民族誌の中で断片的にしか扱われてこなかったアンデスの山の神信仰を、ペルークスコ県での現地調査で得た資料をもとに、その全体像を、外部社会とのダイナミズムという視点から論じ明らかにしている。

前半部第1章から第6章までは、村落社会における山の神信仰の実践とそれをめぐる観念を、外部社会との関係性という観点から解明している。後半部第7章と第8章は、外部社会のインディオ宗教をめぐる言説の産出の場を検証し、この言説と山の神信仰の関係と両者の相互作用の様態を究明した。

方法論的に筆者が用いたのは、特定の文化を対象として扱ううえで、それをめぐる外部社会の言説をも射程に入れる視座である。すなわち、文化をみるうえで、従来民族誌が対象としてきた、文化そのものを対象とするのみでなく、その文化をめぐる言説をも分析対象とすることで、文化の位置する「場」を明らかにし、これとの相互作用を包含した文化の全体像を解明する手法である。本論文の第7章と第8章が扱われたのはこの理由による。

第1章、第2章ではまず、山の神が山や湖、泉、岩、石等、人々をとりまく地理的景観の中に存しており、特定の土地と結びついた場所の神であることを明らかにした。山々に囲まれた景観の中で生活する村の人々と、そこに位置する山の神々との間には互酬的關係が結ばれている。この関係は儀礼を通じて維持され、更新されることを論証した。さらに山の神は、家畜や農作物の形態をした石を贈ることでその恩恵を示す。エンカイチュと呼ばれるこの石は、生命力の本源を物象化するものであり、儀礼のプロセスにおいても、特別な扱いをする。第3章では、このエンカイチュが、カトリックの奇跡の観念と結びついて巡礼を生み出している現象を検討した。山の神信仰における聖なる山や石は、「奇跡」と結びつけられ教会が建設されることで、カトリックの中にとりこまれてきている。しかし、それは一方向的現象ではなく、山の神信仰自体もカトリックの要素をとりこんできている。そしてインディオたちは、現在もなお「奇跡」にエンカイチュをみる。ここでは、カトリックと山の神信仰が互いをとりこもうとする相克の過程そのものが、巡礼の拡大に寄与している現象を解明した。

第4章では、山の神の有する力の概念を分析した。村の守護神にあたる山の神は、村全体の秩序を司り、村の神々を統轄する。この山の神の力は、国家・ミスティ（白人・メスティーソ）の世界の事象をメタファーとして表象される。これは、村の人々と国家やミスティとの間にあるヘゲモニー関係に依拠している。しかしながら、山の神の力は、国家やミスティたちの力に従属しているわけではない。村の人々は彼らを庇護する存在であるユヤイ関係にある神を通じて、国家やミスティの世界に働きかけることが可能であると考えている。このため、彼らが国家やミスティたちと対峙し抗する際、すなわち反乱や農民運動の過程においても、山の神は闘争を助け庇護する守護神として持ち出されてきている。キリスト教の神との関係においても、山の神は「天」にいる神のところに行き、ユヤイ関係にある人々のために働きかけることができるとされている。このように、彼らと外部社会の間に生じた今日の問題解決をはかるうえでも、山の神は彼らを庇護する存在として、メディエーターとして作用すると思われていることを判明した。

第4章では村の歴史表象と山の神の関係を検討した。景観の中に位置する山の神は、歴史的時間を記憶する存在でもある。アンデスでは、先スペイン期に祖先崇拜や始祖に対する崇拜がおこなわれていたが、これがカトリックによる偶像崇拜撲滅運動の主たる対象の1つとなり厳しい弾圧を受けたため村ではみられない。しかしながら、トポロジカルな意味では、祖先や始祖に関わる場所が、現在村の守護神である山と一致していることを論証した。さらに、村の伝承の分析をおこない、太陽に滅ぼされた昔の人々の話であるヘンティレスの伝承が、インカ帝国やカトリックによる支配の歴史を表象しているのではないかということ指摘した。これを通じて、キリスト教的世界観に基づいた歴史、国家の歴史としてのインカ帝国の歴史など、様々な歴史的ナレーションの錯綜する村における歴史の重層性の様相を提示した。

第6章ではカトリック、プロテスタント、山の神信仰の関係について検討した。プロテスタントの信者の拡大は、宗教的問題にとどまらず、信者たちは村の改革そのものをも意図していることを明らかにした。

第7章では国民国家形成という脈絡においてインディオ宗教をめぐる言説の産出の規定要因である「インカ主義」と山の神信仰の関係を論じた。ペルー国家の形成において重要なシンボルとなっているのが、インカ帝国の歴史である。ペルー社会に内在するこのインカ主義は、インディオを「インカ帝国の子孫」と位置づける。しかしながら、インディオとしてカテゴリー化された人々の間で、インカを自分たちの祖先とする歴史認識は確固としたものではない。このことから、農民運動や反乱において地域闘争からより広範囲な闘争へと拡大する際に、山の神が持ち出される位相と、インカがシンボルとして持ち出される位相を指摘し、運動の重層性を論証した。

第8章は、情報社会の出現という脈絡で、観光開発と山の神信仰の関係を考察している。欧米社会に生じた「精神世界」や観光への関心が、現在インディオ宗教にも向けられている。インディオの村落社会と非インディオ社会との結節点にあたるかつてのインカ帝国の首都の存在したクスコ市で、観光開発という脈絡で文化の商品化という現象が起こっている。ここではその中で新たな山の神信仰像も創出されていることを示し、観光客の需要、観光業者、呪術師たちの相互作用の中で、新たな山の神像が創出されていく過程とその様相を検証した。

本論文は、従来それぞれの局面で断片的にしか扱われてこなかった山の神信仰をめぐる諸現象を、互いに関連し合う1つの総体として解明し提示した。その際に対象とする文化を成立させている要素として、外部社会の言説の分析も包含した。このような分析視点は、すでに孤立した存在ではなく、他者の言説の中にも存在し、またそれに取りまかされている先住民族文化が直面している今日的状況をより鮮明に描きだし、そこで起こっている現象を究明していくうえで有効であると考えられる。

論文の審査結果の要旨

本論文はペルーのインディオ（先住民族）社会での精神的な実地調査と文献資料によって、アンデスにおける山の神信仰の実態を明らかにしようとしたものである。実地調査は1988～1993年までクスコ市とその周辺の村で数次にわけておこなっている。論文の構成は前段（1～6章）において、山の神が特定の山、湖、泉、岩、石などの地理的景観のなかに存在すると信じられていること、神々と人間の関係が互酬的なものと考えられていること、その信仰が過去のキリスト教（カトリック）の布教政策により変形をうけているだけでなく重層化していること、それが宗教ばかりでなく統治政策として大きな影響をあたえていること、最近のプロテスタント系の布教にみられる事件の例など村落社会での豊富なフィールドワーク資料に基づいて述べられている。後段（7～8章）は、インカ主義や農民運動という最近の国民国家形成の動きのなかで、山の神信仰がどのような政治的意味をもっているのかという問題と、経済と情報が世界的規模となった現代社会のなかで、とくに観光をとりあげ、山の神信仰がどう利用されようとしているかの実態を追究しようとしている。全体としては、これまで個々に行われてきたアンデスの山の神信仰に対して総合的に考察した論文だといえる。

この論文は、山の神信仰をインディオ自身が語るものだけではなく、村落外部からの見方や意見をふくめた、ダイナミックな像として捉えようとしているところに特徴があり、最近の学界の動向にもじゅうぶん敏感な、若々しい意欲的な論文として評価できる。しかし、そのことは、言葉をかえれば、用語の一部が生硬で、引用文と自らの記録の区別が截然とされていない箇所があるなど、細部に技術的な面での不満がのこる。データの提示の仕方にもっと工夫を凝らすべきであるし、文章をもっと分かりやすく明瞭にする必要がある。これらの点は勿論改良が可能であり、本論文は学位を授与するに値すると認定する。

山の神信仰は世界各地にみられる現象だが、それはアンデスにも共通するところがあるのか、あるとすればどの点で特殊性がみられるのかという視点、および中南米地域との比較研究が加われば将来一層興味深い成果が期待できると考える。